外見スキーマと対人不安および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-01-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000046

外見スキーマと対人不安および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について [1]

学芸学部　心理学科　川上　正浩

要旨：外見スキーマとは、「外見が自己の人生にとって重要な意味をもち、生活の様々な側面に影響を及ぼしていると考える信念」を指す。本研究では、外見スキーマが他者からの評価を受ける可能性をもつ場面、すなわち対人場面における不安とどのように関連しているのか、また、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求とどのように関連しているのかについて、質問紙調査に基づく検討を行った。外見スキーマの自己評価の特徴は状況別対人不安尺度と概ね正の相関を示すが、動機付けの特徴は、状況別対人不安尺度とは関連を示さないことが明らかになった。また、自己評価の特徴は、拒否回避欲求と、動機付けの特徴は、賞賛獲得欲求と正の相関を示した。

キーワード：外見スキーマ、状況別対人不安尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、女子大学生

問題と目的

青年期女性における、身体に対する不満の発生および維持には、外見スキーマ（appearance schemas）が関わっているとされる（安保他，2012；Clark & Tiggemann，2007；Hargreaves & Tiggemann，2002）。外見スキーマとは、「外見が自己の人生にとって重要な意味をもち、生活の様々な側面に影響を及ぼしていると考える信念」（安保他，2012；Cash et al.，2004）を指す。

Cash（2002）は、個人が外見的魅力を重視している程度を中心として、ボディ・イメージがどのように個人に経験され、体験されるかを、認知行動論の立場から検討しようとした。Cash（2002）のモデルによれば、ボディ・イメージは生育史の影響を受けて形成され、ボディ・イメージの認知的・評価的側面である外見スキーマを介して、日常生活に影響を与えていると考えられている。個人内に形成された外見スキーマは、日常の「外見」にまつわる刺激や情報を処理することで活性化され、個人の情報処理に影響を与える。

外見スキーマを測定する測度として、Appearance Schemas Inventory（ASI；Cash & Labarge，1996）および Appearance Schemas Inventory－Revised（ASI−R；Cash et al.，2004）を挙げることができる。ASI は人生における外見の重要性、意味、および影響力に関する個人の信念と、その信念に基づく投資の程度（宮前他，2019）を測定するために開発された（Cash & Labarge，1996）。しかしながら、この ASI を構成する項目の中には、外見に対するステレオタイプ的な考えを測定する項目が含まれていることが指摘され、Cash et al.（2004）は新たに ASI−R を開発した。ASI−R は、自己評価が外見に基づいている程度、および社会的情緒的経験が外見によって左右されている傾向を表す「自己評価の特徴」と、外見の改善・管理に労力を費やす傾向を表す「動機付けの特徴」の 2 つの下位尺度から構成されている。

こうして測定される外見スキーマは、マスメディアによって伝えられる理想的なボディ・イメージを内在化しやすい傾向と関連しており、さらには自らの体型に関する不満感とも関連することが指摘されている（Cash et al., 2004）。また、日本人大学生男女を対象として調査を行なった浦上他（2015）においても、外見スキーマは、やせを理想化し、内在化する傾向と関連することが指摘されている。

18 歳から 22 歳までの日本人女性を対象としてデータを収集した高橋他（2020）は、外見スキーマの自己評価の特徴が、自己の外見に対する否定的感情に影響を与えることを示しており、外見が自己の人生に大きく影響すると考えることは、自己の外見に否定的な感情を与えることを通して、自己受容を難しくすること

[1] 本研究は、2022 年度に提出された学芸学部心理学科認知心理学ゼミ　豊島百喜氏の卒業論文のデータを再分析したものである。

も考えられる。

この点に関して川上（2023）は、“弱みのある自分の受け容れ”、“強みのある自分の受け容れ”、“リセット希求のなさ”、“自己価値の肯定”、“自律性の受け容れ”、“対処能力への自信”の6因子に対応する下位尺度を構成する全17項目からなるコンパクトな自己受容尺度（SACCS：Self Acceptance Compact and Comprehensive Scale）と、外見スキーマ、視線に対する不快感情との関連を吟味している。大学生のデータに基づく相関分析の結果、SACCSで測定される自己受容は、女性においては外見スキーマや視線に対する不快感情と関連していることが示唆された。

一方の、動機付けの特徴については男性においても女性においても、自己受容との明確な関連性は示されなかった。高橋・根建（2016）は、外見のコントロールを試みることは、自身の欠点に注意が向きやすくなることを通して、身体不満足感の増加につながることを予測している。しかしその一方で、外見のコントロールを試みる努力をすることが、自身の充実感を高め、人生満足感を増加させる可能性も指摘している。つまり、動機付けの特徴は、自身の欠点に注意を向けてしまうことで自己受容に対しても否定的影響を持つ一方で、努力に伴う充実感、あるいは人生満足感を介して、肯定的影響をも持ちうることが、ここでは可能性として指摘されている。

すなわち外見スキーマは、個人が外見的魅力をどの程度重視しているか、また、個人が外見的魅力をコントロールすることにどの程度動機付けをもっているか、を評価するものであるが、自身の欠点についてどのように捉えているのか、とも関連することが予測される。そこで本研究では、こうした外見スキーマが、他者からの評価を受ける可能性をもつ場面、すなわち対人場面における不安とどのように関連しているのかについて検討を加える。

さらに、本研究では、外見スキーマが、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求とどのように関連しているのかについても、検討を加える。他者から受ける評価は対人関係上の利益や不利益に結びつく可能性がある（小島他，2003）ことから、比較的誰もが持ちやすい「他者から称賛されたい」あるいは「拒否されたくない」欲求が、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求である。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と本研究でも取り上げる対人不安の関連性を検討した先行研究として、佐々木他（2001）を挙げることができる。

佐々木他（2001）は対人不安と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連について検討を行った。206名の大学生男女を対象に調査が実施され、相関分析の結果から、拒否回避欲求が高まるほど対人不安傾向が強くなり、賞賛獲得欲求が高まるほど対人不安傾向が抑制されることが明らかにされた。この結果から、対人不安とは他者からの否定的評価に対する不安感であり、肯定的評価が得られないことへの不安感ではないとの解釈がなされている。また、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との交互作用も有意であり、拒否回避欲求が低いとき、賞賛獲得欲求の高低は対人不安の程度に影響を及ぼさないが、拒否回避欲求が高いときには、賞賛獲得欲求の高低が対人不安に大きな影響を及ぼし、これは賞賛獲得欲求が拒否回避欲求と拮抗し、対人不安に及ぼす拒否回避避欲求の影響を弱める働きを持つためであると考えられた。

外見スキーマと賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連については、鈴木（2006a，2006b）の研究を参考とすることができる。鈴木（2006a）は、装いと賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連について明らかにすることを目的とし、化粧、衣服をこの一年間に購入した数で測定される、化粧、衣服に関する装い度、この一年間のうち、どのくらいの期間、ダイエットを行なったかで測定されるダイエットに関する装い度を質問紙で測定した。これらと、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連について、重回帰分析により検討したところ、賞賛獲得欲求がすべての装いに共通して関連していることが認められ、さらにその程度は化粧、衣服、ダイエットで、同程度であることが明らかになった。

さらに鈴木（2006b）は、ダイエットの背景にある体型に関する他者評価の認知に注目し、ダイエット行動に繋がる痩せ願望について検討した。構造方程式モデリングによる分析の結果、他者評価に関する痩身体型ベネフィット認知は賞賛獲得欲求の影響を受ける一方で、現体型コスト認知は、拒否回避欲求の影響を受け、痩せ願望を経由してダイエット行動につながることが示唆された。

以上の鈴木（2006a，2006b）の研究を踏まえれば、外見スキーマと賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との間には、関連が認められると予想され、さらにその関連は、自身の外見に対して他者がもつイメージの認知により調整されている可能性がある。そして、そのことが自己受容、さらには本人のwell-beingにつながることも考えられる。

宮前他（2019）は外見スキーマと心理的well-beingとの関連を検討している。ASI-R日本語版（安保他，

2012)、心理的 well-being 尺度（西田，2000)、Public Health Research Foundation Stress Check List Short Form（今津他，2006）を用いた調査の結果、外見スキーマの自己評価の特徴において心理的 well-being 尺度との負の関連が示され、動機付けの特徴においては正の相関が示された。相関係数やパス係数の値の大きさから自己評価の特徴については心理的 well-being 尺度の中の、人生における目的、自律性、自己受容との関連が強いことが示されている。この結果は、自己評価の特徴が外見に重きを置き、自分の外見に対する周囲の評価を気にすることで、自分自身を受け入れにくくし、自分の基準で判断することを避け、自分自身がどのように生きたいのかを困惑させているためであると解釈されている。さらに宮前他（2019）においては、外見スキーマの自己評価の特徴が公的自意識や他者評価懸念と中程度の正の相関を示しており、自尊感情との弱い負の相関を示した先行研究との結果と一致するものであった（安保他，2012)。動機付けの特徴については、自律性との関連がやや弱いものの、心理的 well-being 尺度の他の側面とはおよそ等しく関連が示された。自律性との関連が他の次元と比べて比較的弱いことについては、外見を整えようとする行為そのものが持つ対他的な性質に関連している可能性があると解釈された。つまり外見を整える際に、自分自身が納得するのかどうかに加え、他者からどのように見られているかどうか意識されていることが多いことがあるため、自律性との関連が弱いと解釈された。

本研究では、こうした先行研究を踏まえ、外見スキーマと、対人不安傾向、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連について、明らかにすることを目的とする。

方法

調査時期

調査は 2022 年 11 月から 12 月に実施された。

調査対象者

大阪樟蔭女子大学に所属する大学生 161 名が調査に参加した。ただし、その内の 1 人は性別に関して、「選択しない」と回答した。調査対象者の平均年齢は 20.0 歳（*SD*＝1.00）であった。

質問紙の構成

本研究では、①外見スキーマ尺度、②状況別対人不安尺度、③賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の 3 つの尺度が用いられた。

第一の尺度は外見スキーマを測定するための尺度であった。この尺度は、the Revision of Appearance Schemas Inventory（ASI－R；Cash, Melnyk & Hrabosky, 2004）の日本語版（the Japanese Version of the ASI-R: JASI-R）が使用された。自己評価の特徴は「普段の生活の中で、自分がどのように見えているかということについて、考えさせられることが多い」、「初対面の人と会うときに、自分の見た目について、どう思われるか気になる」などの、外見が自己評価に影響を与える程度の測定に関する 10 項目からなっている。動機付けの特徴は「私は、これまで、自分の外見に注意を払ったことがない（逆転項目)」、「私は、外出する前に、できるだけよく見えているかどうか確認する」などの、外見の管理や改善に対する動機付けの高さの測定に関する 8 項目からなり、外見スキーマを測定する尺度は合計 18 項目であった。調査対象者には、これら 18 項目に対して、「まったくあてはまらない（1)」から「非常にあてはまる（5)」の 5 件法で評定することが求められた。

第二の尺度は状況別対人不安を測定するための尺度であった。この尺度は状況別対人不安尺度（毛利・丹野，2001）から、発表・発言不安、親しくはない相手不安、異性への不安、会話のない不安、目上への不安の 5 つの下位尺度が使用された。発表・発言不安は、「私は人がたくさんいる所で発表するのがこわい」、「会議中に自分の考えを聞かれた時、私はとても緊張する」などの対人状況での不安に関する 8 項目からなっている。親しくはない相手不安は、「あまり親しくはない同年代の人（同性）に出会ったとき、私は不安を感じてしまう」、「初めてあった人と雑談しているとき、私は他の人達より落ち着かない気がする」などのあまり親しくのない対人状況不安に関する 8 項目からなっている。異性への不安は、「異性と二人だけになるとき、私は他の人達よりも落ち着かない気がする」、「私は、あまり知らない異性と話すのが怖い」などの異性の相手との状況不安に関する 5 項目からなっている。会話のない不安は、「自分だけが話の輪の外にいるとき、私は不安を感じる」、「会話が途切れがちなとき、私は不安に感じる」などの会話のない状況不安に関する 5 項目からなっている。目上への不安は、「目上の人（先生や上司、先輩など）と二人だけになるとき、私は不安を感じる」、「私は、目上の人（先生や上司、先輩など）と会うのが怖い」などの目上の人との状況不安に関する 4 項目からなり、状況別対人不安を測定するための尺度は合計 30 項目であった。調査対象者には、これら 30 項目に対して、「全く当てはまらない

(1)」から「非常にあてはまる（5)」の 5 件法で評定することが求められた。

第三の尺度として、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（小島他，2003）を測定するための尺度が使用された。賞賛獲得欲求は「人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい」、「初対面の人にはまず自分の魅力を印象づけようとする」などの 9 項目からなっている。拒否回避欲求は「自分の意見が少しでも批判されるとうろたえてしまう」、「人に文句を言うときも、相手の反感を買わないように注意する」などの 9 項目からなり、合計 18 項目であった。これら 18 項目に対して、「あてはまらない（1)」から「あてはまる（5)」の 5 件法で評定することが求められた。

手続き

本研究では、WEB 調査が用いられた。質問票は Google form で作成され、公開された後に WEB 上で調査対象者に回答が求められた。

リンク先の QR コードが呈示され、調査の参加への依頼がなされた。調査対象者には、スマートフォンで QR コードを読み取ってもらい、それぞれ任意の時間に WEB 調査に回答することが求められた。調査対象者には個人のペースでこれらに回答することが求められた。回答時間は約 10 分であった。

倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されないこと、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることが周知され、Google form 上のインストラクションにも記載された。また、これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

結果

各尺度得点の算出

外見スキーマについて、Cash et al.（2004）の ASI−R（Revision of Appearance Schemas Inventory）の日本語版（Japanese Version of the ASI−R：JASI−R）として安保他（2012）が構成した尺度に倣い、尺度構成が行われた。すなわち、自己評価の特徴 8 項目、動機付けの特徴 5 項目について、それぞれ適切な逆転を施した上で、それらの平均点を下位尺度得点とした。これらの尺度得点の平均値、標準偏差、α係数について、表 1 に示した。α係数は、「自己評価の特徴」が .80,「動機付けの特徴」が .85 といずれも .80 以上の十分な値が得られた。

表 1　各尺度の平均得点、標準偏差、アルファ係数

	変数名	*N*	平均値	標準偏差	α係数
外見スキーマ	自己評価の特徴	161	3.59	0.74	.85
	動機付けの特徴	161	3.71	0.90	.80
状況別対人不安	発表・発言不安	161	3.83	1.01	.85
	親しくはない相手不	161	3.30	0.97	.88
	異性への不安	161	3.36	1.03	.85
	会話のない不安	161	3.43	1.08	.88
	目上への不安	161	3.36	1.13	.88
	賞賛獲得欲求	161	2.53	0.75	.80
	拒否回避欲求	161	3.69	0.80	.86

状況別対人不安尺度についても、毛利・丹野（2001）が構成した尺度に倣い尺度構成が行われた。すなわち、発表・発言不安 8 項目、親しくはない相手不安 8 項目、異性への不安 5 項目、会話のない不安 5 項目、目上への不安 4 項目について、その平均点をそれぞれの下位尺度得点とした。これらの尺度得点の平均値、標準偏差、α係数についても、表 1 に示した。α係数は、いずれも .85 以上の十分な値が得られた。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度についても、小島他（2003）が構成した尺度に倣い尺度構成が行われた。すなわち、賞賛獲得欲求 9 項目、拒否回避欲求 9 項目について、その平均点をそれぞれの下位尺度得点とした。これらの尺度得点の平均値、標準偏差、α係数についても、表 1 に示した。α係数は、いずれも .80 以上の十分な値が得られた。

外見スキーマと他の尺度との相関

外見スキーマの自己評価の特徴、動機付けの特徴について、状況別対人不安尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の下位尺度得点との相関係数を算出し、この結果を表 2 に示した。なお、相関係数については、Cohen（1992）に倣い、$|r|=.10$ を効果量小、$|r|=.30$ を効果量中、$|r|=.50$ を効果量大と判断した。

その結果、自己評価の特徴は、状況別対人不安尺度のすべての下位尺度と、効果量小から中の有意な相関を示した。一方、動機付けの特徴については、状況別対人不安尺度のいずれの下位尺度とも、有意な相関を示さなかった。すなわち、外見スキーマの自己評価の特徴が高いことと、対人不安の高さとが関連していることが示された。

また、自己評価の特徴は、賞賛獲得欲求とは効果量小の正の相関を示すのみであったが、拒否回避欲求と

表 2　外見スキーマの下位尺度と他の尺度との相関係数

	状況別対人不安					賞賛獲得欲求	拒否回避欲求
	発表・発言不安	親しくはない相手不安	異性への不安	会話のない不安	目上への不安		
自己評価の特徴	.213 **	.241 **	.306 **	.381 **	.237 **	.198 *	.425 **
動機付けの特徴	-.082	-.122	.061	.036	-.112	.327 **	.101

は効果量中から大の正の相関を示した。逆に、動機付けの特徴は、賞賛獲得欲求とは効果量中の正の相関を示したが、拒否回避欲求との間には相関関係は認められなかった。

考察

本研究では、外見スキーマの下位尺度得点が、状況別対人不安尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の下位尺度得点とどのように関連しているのかを検討することを目的とした。調査の結果、外見スキーマの自己評価の特徴は状況別対人不安尺度と概ね正の相関を示すが、動機付けの特徴は、状況別対人不安尺度とは関連を示さないことが明らかになった。すなわち、状況別対人不安尺度が高いことは、自己評価の特徴が高いこととは関連するが、動機付けの特徴とは関連しない。

状況別対人不安尺度は、様々な状況における対人不安を状況別に測定する尺度であるが、本研究においては、どのような状況であるか、については、それほど弁別的ではなく、全ての状況に関して自己評価の特徴には有意な相関が認められ、動機付けの特徴には相関は認められない、という結果になった。

外見スキーマの自己評価の特徴は、本人自身の自己評価や社会的情緒的経験が外見によって影響されると考える程度を表す尺度であり、人生において、外見が非常に重要な意味をもっていると考える尺度である。こうした自己評価の特徴が、状況別対人不安尺度と相関を示したことは、対人不安に関して、他者から自分を見られる、評価される、ということに対しての不安が大きな割合を占めていることを示唆する。つまり、自らの発言あるいは発表で、自身（の外見）に注目が集まる場面、あまり親しくない相手や異性、また目上の人間と出会ったり雑談したりする中で自身（の外見）に注目が集まる場面において、自己評価の特徴が高いものがより不安を感じやすいことは、自己評価がそうであるように、他者からの評価も外見によって定まると考えているためであると解釈することができる。特に本研究の結果、自己評価の特徴は拒否回避欲求との相関は認められるが、賞賛獲得欲求とは関連していなかったことからも、外見スキーマにおける自己評価の特徴は、よりネガティブな自己の外見イメージにつながっていることも想定される。自己の外見イメージがネガティブであることが、自身（の外見）に注目が集まることへの不安や拒否されることへの不安につながるのかもしれない。

この点に関して川上（2023）は、SACCS で測定される自己受容と自己評価の特徴の間に負の相関が認められることを示している。これは、18 歳から 22 歳までの女性を対象としてデータを収集した高橋他（2020）が示した、自己評価の特徴が、自己の外見に対する否定的感情に影響を与えることと整合的である。そして、先述のネガティブな自己の外見に対する評価という考え方とも整合的である。

しかし一方で、自己評価の特徴ともっとも高い相関を示したのは「会話のない不安」であり、これはむしろ自身、特に自身の外見には注目を集めない状況である。こうした状況での不安が自己評価の特徴との関連がより強い理由については、現状では明らかではなく、今後更なる検討が必要であると言える。

外見スキーマの動機付けの特徴については、状況別対人不安尺度とは相関を示さなかった。つまり、自らの外見を整えようとする動機付けは、様々な状況における対人不安とは関連しておらず、必ずしも不安を解消しようとする方向の動機付けではないことが示唆される。自身の外見に対して、一定程度のポジティブな認知、評価を行っており、こうした他者から自身（の外見）に注目が集まる場面においても不安を感じない者であっても、動機付けの特徴は高くなる可能性があることが示唆される。このことは、動機付けの特徴が拒否回避欲求とはむしろ相関を示さず、賞賛獲得欲求とのみ相関を示していることとも整合的である。

ピアスやいれずみなどの身体装飾に対するイメージと、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求との関連について検

討を行った田中他（2014）は、特に、拒否回避欲求が高いほど、「痛そうである」「ケアが大変そうである」といった身体装飾（ピアス）への拒否感が高いことを示している。さらに小島（2007）も、一般的自己呈示イメージ尺度（小林・谷口，2004）の中の「外見的魅力」すなわち、「おしゃれな」「容姿がよい」と思われるようにこころがけていることや、一般的自己呈示行動尺度（谷口・小林，2005）の中の「外見行動」すなわち、「服や髪型をおしゃれにする」「身だしなみをきちんとする」行動をとっていることが、賞賛獲得欲求とは正の相関を示しているが、拒否回避欲求とは無相関であることを示している（谷口・小林，2004）。これらの研究結果は、本研究の結果における、拒否回避欲求と動機づけの特徴との相関が高いことと整合的である。さらに、吉澤（2012）が賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の高低から他者に示したい自己の側面の違いを調査した結果、拒否回避欲求の高低にかかわらず、賞賛獲得欲求が高い個人は低い個人よりも外見的魅力や有能さの側面を自己呈示したいと考えていた。このことも、賞賛獲得欲求の高い者が持つ外見的魅力に対する自信の表れと言えるだろう。

佐々木他（2001）は、男女大学生 206 名を対象に、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求と、Leary（1983）による相互作用不安尺度の日本語版（岡林・生和，1991）との関連性を検討した。相関分析の結果、拒否回避欲求の高さと対人不安傾向が関連していること、賞賛獲得欲求の高さは、むしろ対人不安傾向の低さと関連していることが示された。また、吉澤（2020）は、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および、評価への恐れが社交不安に与える影響を質問紙調査によって改めて検討した。その結果、拒否回避欲求は評価への恐れを高めるが、賞賛獲得欲求は、評価への恐れや社交不安を低めることが示された。この結果を吉澤は、賞賛獲得欲求の高さが自らのパフォーマンスへの自信に結びつき、自己呈示の動機付けが高まるように作用する一方で、失敗不安を間接的に抑制することを通して、社会不安を低下させるよう作用すると考えている。このことからも賞賛獲得欲求の高さが自らの外見に対するポジティブな評価や自信へと結びつき、それが自己の外見をさらに高めようとする外見スキーマの動機付けの特徴に繋がると同時に、対人不安も減少させるように働いていることが示唆される。

笹川・猪口（2012）は、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響を調査し、拒否回避欲求と対人不安傾向は一貫して関連するが、賞賛獲得欲求と対人不安傾向は互いに無相関であることを示している。また、吉澤（2014）は、講義で実習の一環として行うスピーチ場面における否定的感情の生起に、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求が及ぼす影響について検討している。その結果、話者の拒否回避欲求が、スピーチ場面での否定的感情の生起を促進すること、また、拒否回避欲求が高い話者に限って、賞賛獲得欲求が否定的感情の生起を弱く抑制することが示唆された。また、小笠原・中川（2018，2021）は、「他者の面前での発話」という場面において多くの人が直面しうる問題である「あがり」について、これに影響する個人特性を明らかにすることを目的として実験を行った。「あがり」に影響する個人特性については、有光・今田（1999）が既に、「否定的評価への恐れ」が「あがり」を生起させる可能性を示唆しており、この研究においても、他者からの否定的な評価を避ける欲求である拒否回避欲求が取り上げられた。スピーチ映像の撮影を行う、という実験的手法により心理・生理的指標をどちらも取り上げる形で検討が行われた。具体的には緊張を、課題前や課題中に心理的高揚を感じる状態である主観的緊張と、心拍数によって測定される生理的緊張とに分離して取り扱った。小笠原・中川（2018，2021）では、拒否回避欲求が高い話者において、スピーチ予期時に心理的緊張が高まり、スピーチが始まると心拍数が高まり、「あがり」が認知されるというメカニズムが示された。そして、拒否回避欲求の高低と「あがり」の喚起に関連が示され、拒否回避欲求が「あがり」を生じさせるとする先行研究（有光・今田，1999）を実証的に支持する結果となった。こうした研究結果も考え合わせると、対人不安傾向は、ネガティブな自己の外見に対する評価、そしてそれを拒否されることを回避したいと考える心性、外見スキーマにおける自己評価の特徴から生まれるものであると考えることもできる。

つまり、本研究の結果からは、特に自己の外見に対するネガティブなイメージが、本人自身の自己評価や社会的情緒的経験が外見によって影響されると考える自己評価の特徴につながり、逆に自己の外見に対するポジティブなイメージは、より賞賛を獲得したい、そしてそのために外見をよりポジティブな方向に高めていきたい、という欲求につながる可能性が示唆された。

引用文献

安保 恵理子・須賀 千奈・根建 金男（2012）. 外見スキーマを測定する尺度の開発および外見スキーマとボディチェッキング認知の関連性の検討　パーソナリティ研究, 20, 155−166.

有光 興記・今田 寛（1999）. 状況と状況認知から見た“あがり”経験　情動経験の特徴による分析　心理学研究, 70, 30−37.

Cash, T. F.（2002）. Body image: Cognitive behavioral perspectives on body image. In T.F. Cash & T. Pruzinsky（Eds.）, Body image: A handbook of theory, research, and clinical practice（pp. 38−46）. New York: The Guilford Press.

Cash, T. F., & Labarge, A. S.（1996）. Development of the Appearance Schemas Inventory: A new cognitive body−image assessment. Cognitive Therapy and Research, 20, 37−50.

Cash, T. F., Melnyk, S. E., & Hrabosky, J. I.（2004）. The assessment of body image investment: An extensive revision of the Appearance Schemas−Inventory. International Journal of Eating Disorders, 35, 305−316.

Clark, L., & Tiggemann, M.（2007）. Sociocultural influences and body image in 9 to 12−year−old girls: The role of appearance schemas. Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 36, 76−86.

Cohen, J.（1992）. A power primer. Psychological Bulletin, 112, 155−159.

Hargreaves, D., & Tiggemann, M.（2002）. The role of appearance schematicity in the development of adolescent body dissatisfaction. Cognitive Therapy and Research, 26, 691−700.

今津 芳恵・村上 正人・小林 恵・松野 俊夫・椎原 康史・石原 慶子・城 佳子・児玉 昌久（2006）. PublicHealthResearchFoundationストレスチェックリスト・ショートフォームの作成―信頼性・妥当性の検討―　心身医学, 46, 301−308.

川上 正浩（2023）. 女子大学生の自己受容を測定する（6）―外見スキーマ、視線に対する不快感情に関わる男女の比較―　大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 17, 27−35.

小林 知博・谷口 淳一（2004）. 一般的自己呈示尺度作成の試み（1）　日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 116.

小島 弥生（2007）. 日常生活における自己呈示と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連　立正大学心理学研究所紀要, 5, 1−11.

小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介（2003）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み　性格心理学研究, 11, 86−98.

Leary, M. R.（1983）. Understanding social anxiety. Beverly Hills, CA: Sage Publications.*（リアリィ, M.R. 生和秀敏（監訳）（1990）. 対人不安　北大路書房）*

宮前 光宏・大江 悠樹・上家 倫子・丹松 由美子・堀越 勝（2019）. 外見スキーマが精神的健康に与える影響―女性を対象とした横断研究― Journal of Health Psychology Research, 31, 89−99.

毛利 伊吹・丹野 義彦（2001）. 状況別対人不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, 14, 23−31.

西田 裕紀子（2000）. 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well−being に関する研究　教育心理学研究, 48, 433−443.

小笠原 香苗・中川 敦子（2018）. 逃げるは恥か？役立つか？―拒否回避欲求がスピーチ中の「あがり」に与える影響―感情心理学研究, 26（Supplement）, os14.

小笠原 香苗・中川 敦子（2021）. 拒否回避欲求がスピーチ中の失敗の認知に及ぼす影響―失敗認知時の主観的緊張感・心拍数に着目して―感情心理学研究, 28, 67−72.

岡林 尚子・生和 秀敏（1992）. 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究　広島大学総合科学部紀要Ⅲ情報行動科学研究, 15, 1−9.

笹川 智子・猪口 浩伸（2012）. 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響　目白大学心理学研究, 8, 15−22.

佐々木 淳・菅原 健介・丹野 義彦（2001）. 対人不安における自己呈示欲求について：賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から　性格心理学研究, 9, 142−143.

鈴木 公啓（2006a）. 装いと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連　パーソナリティ研究, 14, 230−231.

鈴木 公啓（2006b）. ダイエットと体型に関する他者評価への認知　日本心理学会第 70 回大会発表論

文集, 250.
高橋 恵理子・根建 金男（2016）. 青年期女性の身体不満足感への認知行動的介入 —— 外見に関する信念に焦点を当てた思いやり/いつくしみのアプローチ　行動療法研究, *42*, 225-235.
高橋 恵理子・関口 由香・根建 金男（2020）. 外見的魅力を重視する信念が身体不満足感、外見に関する問題行動、ウェルビーイングに及ぼす影響　女性心身医学, *25*, 19-25.
田中 孝・水津 幸恵・大久保 智生・鈴木 公啓（2014）. 身体装飾としてのピアス・いれずみの実態とそのイメージの検討―賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との関連から―　香川大学教育学部研究報告 第Ⅰ部, *142*, 53-62.
谷口 淳一・小林 知博（2004）. 一般的自己呈示尺度作成の試み（2）　日本心理学会第68回大会発表論文集, 117.
谷口 淳一・小林 知博（2005）. 一般的自己呈示尺度作成の試み（3）　―自己呈示行動尺度の作成―　日本心理学会第69回大会発表論文集, 244.
浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子（2015）. メディアの利用と痩身理想の内在化との関係　教育心理学研究, *63*, 309-322.
吉澤 英里（2012）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と自己呈示の動機との関連について 青山心理学研究, *12*, 51-56.
吉澤 英里（2014）. スピーチ予期時の話者の否定的感情―賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と聴衆の存在から―　感情心理学研究, *21*, 156-161.
吉澤 英里（2020）. 承認欲求と評価への恐れが社交不安に及ぼす影響　社会心理学研究, *36*, 10-15.

The Relationship between Appearance Schemas, Situational Social Anxiety, and the Strength of Praise Seeking and the Rejection Avoidance Needs.

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Masahiro KAWAKAMI

Abstract

Appearance schemas refers to “the belief that appearance has important meaning in one's life and influences various aspects of life.” In this study, we investigated how anxiety is related to situations in which there is a possibility of being evaluated by others, that is, interpersonal situations, and how it is related to the strength of praise seeking and the rejection avoidance needs. An investigation based on a questionnaire survey was conducted. The results showed that Self−Evaluative Salience of the appearance schemas generally showed a positive correlation with the situational social anxiety scale, but the Motivational Salience showed no relationship with the situational social anxiety scale. In addition, Self−Evaluative Salience were positively correlated with the rejection avoidance needs, and the Motivational Salience were positively correlated with the strength of praise seeking.

Keywords: Appearance Schemas, Social Anxiety Scale by Social Situations, Strength of Praise Seeking and Rejection Avoidance Needs, Women University Students